

カンボジア・トンレサップ湖の浸水林植生と水上住宅の暮らし

荒木祐二

東京大学 アジア生物資源環境研究センター
地域資源評価研究室

トンレサップ湖は東南アジア最大の淡水湖である。この湖の面積は季節に応じておよそ 3,000km² から 18,000km² まで変化する。湖畔には植生高が 10m を超える浸水林が成立し、湖が拡大すると森林そのものが水にのみ込まれて 5 カ月ものあいだ冠水状態となる。ここには冠水や人々の土地利用に適応した 54 科 130 種類ほどの植物が生育する。

一方、湖岸域の住民の多くは水上住宅で暮らしており、湖岸線の移動にあわせて年に 20 回ほど引っ越しを繰り返している。人々は主として漁労を営み、浸水林から燃料用の薪や漁の仕掛け用の材料などを享受している。しかし、人口の増加や湖での大規模な開発などによって、浸水林が荒廃し人々の生活基盤である森林の消失が懸念されている。

■引用文献:

荒木ほか. 2010. 「トンレサップ湖の自然」. クロマーマガジン編集部(編)『クロマー
ートラベルガイドブック Vol.14』. APEX Cambodia, 印刷中